

芸豪烈伝その3

東家浦若

あずまや・うらわか

ともしひ

浪曲の最後の灯火は消せない

写真・森 幸一 文・おさだ衛



浪曲の『今そこにある危機』と敢然と戦う東家浦若。ハリソン・フォードよりもすこし年かさだが、そこはそれ、「年はとつても腕に年はとらせない」。啖阿は名人級の面白さを発揮する、人生の達人だ。

浦若師の浪曲は「牛モツ煮込み」のように美味しい。ダイコン、ニンジン、

あずまや・うらわか 大正7年うまれの76歳。東京は日本橋の出身。戦争中は「浪花節ができたおかげで特別待遇をもらい、命びろいができました」。趣味は「読書でね。かたっぱしから、何でも読みました」。歌舞伎や映画観賞も大好き。信条は「ホトケさまを大事にすること」。

ゴボウに唐辛子と見た目も美しく、味噌の匂いも香ばしく、食べ飽きず、栄養もあり、冬に向かい身体が暖まる。「しゃべることは昔から達者だった。写実的な表現がうまかったね。十八、十九の頃から寄席の席亭が巧者(うまい)と、こづかいをくれたもんだ」

梅檀は双葉より芳し。浦若師は十八のデビュー当時から啖阿は巧みだった。

ネタを高座にかけると、内容を吟味し、歴史的事実を文献で調べ、映画や芝居になっていけば見聞きし、笑いを入れ、表現を工夫し、入念に下準備をする。ネタに幅と深さが出るわけだ。

「歴史ネタは史実に近く演らないとね。ウソやデタラメだと、お金を払っていただくお客さんに失礼になる」

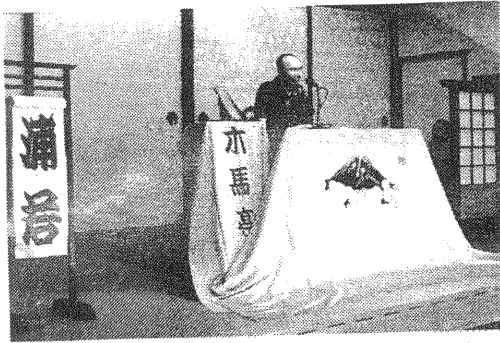
浦若師は木馬亭の楽屋主任として出演メンバーを決定し、演者として高座をこなすかたわら舞台進行などの諸事万端をこなす。マイクを通しての客のご機嫌をうかがう間も良い。

先日、講談の若手が老成した口調に終始し、盛り上がり欠けたまま高座を降りたあと、

「ただいまの若手は、お耳に心地よくなかったと思いますが、修業中の身であり、末長く応援してください」という意味の言葉でフォローしていた。

楽屋主任として、提供する「商品」の値踏み、客のイラ立ちを和らげる機転、次の演者につなげる自然な応対。

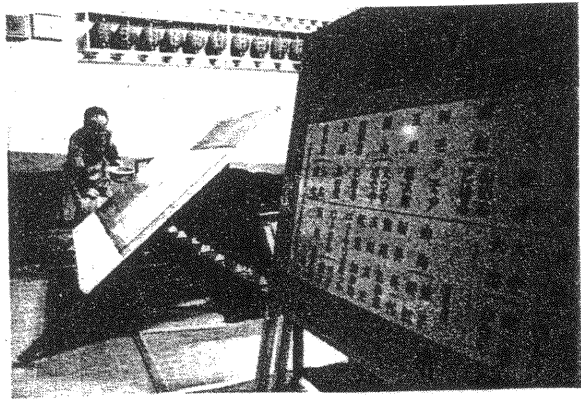
人間心理に長けている浦若師のフア



節は、やらないが啖阿は絶品。「子を見ること親に如かず。親父は私が声がよくないのを知っていて、浪曲に向いてないと思っていた」

ンは多く、私も師を追いかけた一人だ。「日蓮記」「籠釣瓶 後日談」「三浦屋孫次郎の首とり」など、洗練されたネタで、ひとあじ違う趣向がある。
「昔は浅草界限にもたくさん、浪曲だけの寄席があった。出演したら七日間違うネタを、それも他の演者とダブらないようにするから、ネタはいまでも百から百五十はあるね」
お元気なうちに、その粒ぞろいのネタをテープに吹き込んで保存してほしい。貴重な芸能の遺産になるはずだ。
この取材のために浦若師から聞いた前半生は波瀾万丈だ。母を慕う幼年時代、丁稚奉公、女郎との淡い交情、戦時中の中国大陸での浪曲の慰問(プロデューサーとして芝居も手がけた)、妹との戦後の劇的な出会いなど。

スベースがなくて紹介できないが、浦若師の人生は時に「嘘の母」であり、「路傍の石」や落語の「明鳥」、『野狐三次 お糸の危難』であり、人の世の有為転変、因縁の不思議さを感じさせる。晴れた日があり、雨の日もあり、酸いも甘いもかみわけ、文字どおり人生の幾山河を渡ってきた。
浦若師の父は寄席読みの名人・東家楽浦だ。昭和53年に80歳で天寿を全うした。昭和45年の木馬亭開場に尽力した、浪曲界最大の功労者の一人だ。
「うまかったですねえ。ネタ数の多さ、内容の深さと濃さは比類がなかった。私なんか足元にも及ばない。聞きはじめると、イヤでも最後まで引きずられる話術の冴えがありました」
来る1月15日(日)、その東家楽浦を偲ぶ会が木馬亭で催される。
楽浦は野口甫堂のペンネームで多数の浪曲台本を残したが、当日は東家楽浦太郎、玉川勝太郎、太田英夫らが故人ゆかりの演題で臨む。浦若師も「たぬきの報恩」で長講する。立川談志の特別出演もあり、見逃せない演芸大会だ。
浪曲の黄金時代を身をもって体験している浦若師は今の浪曲界をどう見ているのだろうか。
「太田英夫や玉川福太郎が、これからの浪曲を引っばっていくことになるんですが、やはり人材が欠乏していますね……。太田に福ちゃん、国本武春たちに浪花節を再生させてもらわないと。しりつ



看板作成、メクリづくり、となんでも出来る。「東家楽浦太郎が親父の一門で、まだガンバッテいるから、私もここまで、やってこられた」

ばみは避けられないが、どれだけの人間が浪花節を維持させていけるか……」
浪曲ファンの多くは、浦若師が一日でも長く高座に立ち、木馬亭が一日でも長く存続することを祈っている。
「浪曲の衰退を、浅草のさびれかたに結びつけたくない。木馬亭は浪曲界最後のトリデです。浪曲のともしびは消したくないですよ」
11年増女と真蛸の味は、かめばかむほど味が出る、は浦若師十八番の「猿正宗」のフレーズ。師の浪曲は牛モツ煮込みだが、かめばかむほど味が出るのは浦若師本人でした。 おわり

浪曲... これほどすばらしい芸は他にはないと思います。
浪曲家の皆さん... 頑張って下さい。
多くのファンを楽しませて下さい。
3/52
葛飾区・坂本豊吉